

去る者は日に疎し *Out of sight, Out of mind*

医療法人 小金井中央病院 理事長・名誉院長

田 中 昌 宏

自治医科大学消化器内科学教室開講五十周年、誠におめでとうございます。歴代の教授、医局員、スタッフ皆様の^{ため}弛まぬ日々の努力の賜物です、過去に医局に在籍した者の一人として心よりお祝いを申し上げます。50年と一口に言いますが子供から見れば気の遠くなる先の将来のことでしょう。一方、高齢者からは過ぎ去った過去の道標のひとつでしょう。私の長男は今年49歳になります、彼の人生を親からみると、50年って早いね～と実感します。少年老い易く学成り難しです。

私自身は78歳を迎え懐かしい往時を偲べば研究、臨床、学生教育に追いかけて悲喜こもごもの事象が走馬灯のように思い出されます。一気呵成に休まずにひたすら走り続け、今までの全てが束の間の出来事であったかのようにも感じられます。マッチ箱のように狭いレジデント住宅で親子5人が寄り添って生活を共にする、若かったゆえにそんな生活が可能だったのでしょうか。時間の感覚は一人一人のおかれた状況で変化し、心の在り方でも揺れ動くものなのでしょう。

戦国武将に代表される中世人は死が日常にあり現代人の我々とは理解が異なります。“人間五十年、^{けてん}化天のうちを比ぶれば夢幻の如くなり。一度、生を享け、滅せぬもののあるべきか……（幸若舞、敦盛）”と謡い、本能寺で信長は“^と土岐は今、天が下しる五月かな（時はいま雨が下しる五月かな）”の辞世の句で有名な明智光秀の大軍にあっけなく討たれてしまいます。この世では人間はおおよそ50年生きるが、それは如来や菩薩が棲む化天からみれば、それはたったの一日の長さに過ぎないとされる。人は必ず死ぬ定めであり、たった一日しか生きていない命と思えば、今日に死すとも是非に及ばずと信長は天命を受け入れます。

私が医局に在籍した期間は1977年から1989年（平成元年）の13年余で、1983年から4年間は医局長を命じられました。主任教授は故木村健先生、主たる医局員は故酒井秀朗先生、山中桓夫先生、井戸健一先生、関秀一先生、そして吉田行雄先生、そしてレジデント数名でした。新進気鋭の教授は不惑前後で年若く、潑刺として若殿のような凛とした雰囲気の中にも自信のほどが窺われました。眼光は鋭く笑うと人懐っこい表情が垣間見え憎めないお人柄とお見受けしました。しかし気に障ると怒気を含んだ視線は厳しく、容赦のない詰問が飛んできたことを覚えています。一方で感動すると素直に喜びを体現し周囲の医局員と喜びを共有するなど棟梁としての資質も兼ね備えていました。医局の隅々までに目を配って、“田中君、

教授室まで来たまえ”と声のかかった当初は非常に怖かったことを思い出します。東大出身のエリートの顔を持つ反面、情熱的・易感動性・感情を一気に高ぶらせる性格は封建時代の中世人気質とよく似ています。教授が怒りを発する原因には一本筋が通っていて、「忝い（かたじけない）」という侍言葉の真意を理解しない人々には不機嫌や怒りを表出していた気がします。単なる短気ではないのです。こちらは何もしてあげられないのに身に余るような好意を受けたとき、それに対する感謝や有難味の薄い人間を嫌っていた、時には指弾もしました。人身受け難し、人間に生まれたことを当然と思うような無神経な精神の人間を遠ざけていました。来客の折、医局長として同席することを許されることも多く、客が帰った後に「厚かましいやつだね」と小さく呟く声をよく耳にしたものです。私に呟いたのか、それとも天に呟いたのかは定かではありませんがいつも感性が研ぎ澄まされている、そういう方でした。

話は変わりますが、今でも身に沁みて覚えているのは、徹夜で私の学位の英語論文を添削していただいたときの事でした。私の英語力が拙いこともあって高校生レベルにまで遡って丁寧、詳細に英語の基礎勉強をご指導いただきました。教授はwhy、whyを繰り返し、元となる日本文すら厳しく追い込まれました。添削が終わったところには夜が明けて、教授の眼は充血し鬼気迫るといった顔貌でお疲れの様子でした。私は、これほど懇切に真剣に、厳しく勉強を教えてもらったことは今だかつてありませんでした。エリート教授の知性、学力、洞察力そして緻密性をまざまざと思い知らされました。緩みのない一対一の戦い？8時間及ぶ指導に私は感謝しつつも頭のATPが枯渇し頭の芯はしびれていました。途中、口に入れたものは互いに缶コーヒー1缶のみ、私は間もなく音を上げてしまいました。今の置かれたこの状況では何をやっても教授にはかなわないという現実を受容せざるを得なくなり、降参しました。惨めさに覆われましたが、こちらも生意気に？健気に？自説を展開したことが傷口を深めました。虚心坦懐で臨めばとの反省もありましたが後の祭りでした。学問に対する厳しい姿勢、スパルタ教育を通して、教授の愛情はわが魂に深く突き刺さりしました。これ以上はない御指導を賜ったものと深く感謝をしています。

医局長になった時には、(1) 和をもって貴しとなす、(2) 四十歳までは少なくとも大学で勉強する、(3) 一医局員といえども自治医科大学消化器内科の看板を背負っているという矜持を自覚する、という三つの御指導をいただきました。この中で(1)は聖徳太子の十七条の憲法。医師として仕事を円滑に進めるには周囲の協力、ヒトの和が必要で重要なこと、(2) 礼記（四書五経）に“四十にして仕^{つか}う”という記載がある。人間四十歳までは修行の時代と心得て潜行密用し自己を磨くことに専念する、四十歳を過ぎたら今度は社会に還元・奉仕すべきという考え。



写真1 左から 木村健先生、田中昌宏
日本消化器病学会関東地方会（会長 木村健）
東京砂防会館、昭和50年代後半

（3）医局員の矜持に関しては「食牛の気」という題で消化器内科教室開講四十周年記念誌に既述。：呱呱の声を上げた寅の子は自分の数十倍はあろう大きな牛をみて喰らおうとする激しい気性を有する。これらの教授方針をあまり厳しい形で運用する力量が自分にはないので時間をかけて折に触れて医局員に遵守させることが医局長のお務めと深く心に刻みました。知識をひけらかすこともなく漢籍にも明るい教授、そのような方の聲咳に接することができたのは全くの幸運でした。遠い昔のことですが現在も有り難く感謝しています。今年は故木村健先生の七回忌にあたります、改めて心より先生の御冥福をお祈りいたします。



写真2 栃木県消化器病研究会新年会
（ホテル ニューイタヤ）
幹事長挨拶 田中昌宏 平成23年1月

お陰様で小金井中央病院は開院以来36年目を迎えました。自治医大消化器内科の先生方にお手伝いいただき大変助かっています。また医局出身の和田伸一副院長、宮田なつ実内科医長も勤務されています。菅野健太郎名誉教授、山本博徳教授、矢野智則教授をはじめ、消化器内科医局のすべての皆様方に改めて御礼を申し上げます。